

前田光世ゆかりの地

出生地と弘前公園に前田光世記念碑及び顕彰碑建立

1956年(昭和31年)5月、「第一回世界柔道選手権大会」が蔵前国技館で開催された。その時に前田光世を顕彰する会が組織され、郷里に記念碑を建てることとなる。発起人代表は当時弘前大学の学長であった郡場寛が務め、発起人には講道館関係者、参議院長の佐藤尚武、藤森弘前市長等が名を連ねた。同年10月13日、前田光世の出生地である弘前市富栄字笹崎のりんで煙で「前田光世先生出生の地」記念碑の除幕式が行われた。翌14日弘前公園において顕彰碑除幕式が行われ、講道館館長嘉納麗正を始めとする講道館関係者が列席した。除幕式後には弘前市内の高校生の柔道の試合が行われ、弘前市公会堂(現在の弘前市役所庁舎の敷地)にて懇親会も行われている。

前田光世先生
出生の地記念碑



前田光世先生顕彰碑



映画化を目指して

せまい島国を抜け出して、未だ見ぬ広大な世界に雄飛したい。いつの時代も若者なら多くが夢見ること。前田光世も例外ではなかった。前田は柔道を世界に広めるミッションを任せ渡米、意気揚々と乗り込んだアメリカで、日本に対する強烈な蔑視と闘うことになる。柔道普及の旅の途中、前田は各地の日本人の居留地を訪ね歩いた。厳しい植民事業の現状と苦勞を理解し、激励のために自ら闘う姿を見せては日本民族の誇りを取り戻させた。当時は世界のほとんどが列強国の植民地であった。厳しい人種差別や奴隷制度の後遺症もまだ残っていた。前田はそういった環境の中、裸一貫、異種格闘技試合を続けながら、日本との国交も結ばれていない中南米の国々を歩き続けた。

日本を出る前に託された「米国に柔道を広めることによって、国際社会における日本民族への意識の目覚めと高揚を目指す」という当初の目的は、晩年「移民事業によるアマゾン開拓」という形に姿を変えて行くが、生涯に渡って一貫して前田の魂を突き動かしていたのは、日本人としての誇りと純粋な愛国心だったことに他ならない。

「グローバリズム」、「日本人のアイデンティティ」といった言葉が叫ばれる今日、明治から昭和の時代にかけて、日本を背負い世界中を歩き歩いた郷土の偉人コンデ・コマと前田光世のその生き様から学ぶことは多いのではないだろうか。

令和の今こそ彼の物語が必要だ！

前田光世物語 ～コンデ・コマと呼ばれた男～

発行：弘前フィルムコミッション TEL.0172-35-3131 (発行日/令和7年12月1日)

制作：(株)協同

文：坂本 崇 ※このパンフレットは三戸健次氏の著書「コンデ・コマ物語(路上社)」をベースに、さまざまな文献を参考にして執筆しています。

◇参考文献
「前田光世 世界柔道武者修行」：丸島 隆雄(島津書房)
「ライオン」の夢 前田光世 伝：神山 典士(小学館)
「コンデ・コマ物語」：三戸 健次(路上社)
「前田光世コンデ・コマの生涯」：前田 金作・山本 銀司・高橋 清一
「中学生のための弘前人物志」：弘前市教育委員会
「青森20世紀の群像」：東奥日報社

「津軽のやわら本覚克己流を読む」：太田 尚充(水屋舎)
「本覚克己流探求(巻一 一初級編一)」：河野 真通
「郡場寛先生遺稿集」：郡場寛先生遺稿集刊行会
「兄 私だけが知るアントニオ猪木」：猪木 啓介(講談社)
「ひろさき読解本」：公益社団法人弘前観光コンベンション協会

くられ！必殺！YAMATO DAMASHII

前 MAEDA 田

光 MITSUYO 世
物語

～コンデ・コマと呼ばれた男～

目指せ！映画化！！

映画「いとみち」プロデューサー
松村龍一さん推薦！

柔よく剛を制す「柔道」の源流をたどる、世界格闘の旅。激動の時代を大和魂で生き抜いた世界に誇るべき日本人の物語。

2028年
前田光世
生誕
150周年

名山
名士を
出す
陸羯南



少年時代・柔道修業時代

前田榮世誕生

1878年(明治11年)11月18日前田榮世(後の前田光世)は、父・了、母・いその長男として、岩木山麓の中津軽郡富栄村(現弘前市富栄)に生まれる。小学生の頃から立派な体格で肉付きも良く、父親譲りの相撲好きで、秋祭りの宮相撲大会で向かうところ敵なしの大活躍。近所の人たちから「相撲っこ」と呼ばれ将来の力士を囑望された。

1893年(明治26年)、旧制弘前中学(現弘前高校)の入学試験に挑戦。倍率3倍の難関を見事突破し、弘中生となった前田は、1894年(明治27年)11月仲間とともに旧弘前藩の藩校「稽古館」の柔術(本覚克己流)指南役であった齋藤茂兵衛に指導を懇願。齋藤の指導の下、翌1895年(明治28年)1月、学校の新年会で柔術を披露した。同年6月には弘前中学に正式に柔術部が発足。前田は学業そっちのけで柔術に没頭した。いつしか周囲に闘う相手がいなほど腕を上げた前田は「もっと大きな世界で自分の腕を試したい」と一念発起、1896年(明治29年)5月、両親の反対を押し切って家出同然に上京した。



前田が生まれ育った船沢地区の風景

講道館の門を叩く〜米国遠征決定まで

上京した前田は早稲田中学に編入。東京専門学校(現早稲田大学)に柔道部が新設されたことをきっかけに講道館柔道と出会い、1897年(明治30年)6月に講道館に入門。入門後は講道館四天王の1人である横山作次郎などに鍛えられ、めきめきと頭角を現す。

1898年(明治31年)12月25日、講道館道場では有段者を決める恒例の試合が催されていた。この時、嘉納治五郎講道館初代館長の命により、前田は15人抜きを命ぜられ、見事これを達成。15人抜きのレコードをつくり関係者を驚かせた。翌1899年(明治32年)1月8日の鏡開き式で前田は正式に初段を与えられ、同年10月には二段に昇格。1年間の間に二段昇格という異例の昇格を遂げた。当時は「技あり」も「有効」もなく、勝負は「一本」でしか決まらなかった。それを3本勝負で勝ち抜いていくことは体力だけでできることではなく、技能も卓越していなければならなかった。前田は小さい頃から足腰が強いだけでなく、弘前中学時代に本覚克己流柔術をやっていたこともあり、講道館入門当初から目立った存在だった。前田は毎日講道館で熱心に稽古を続け、1901年(明治34年)1月13日には三段に昇格した。

柔道界で前田の名前は広く知れ渡り、高段者として後輩を指導するようになっていく。特に嘉納師範からの信頼は厚く、前田は師範の推薦で早稲田の学生の身分のままで早大、陸軍中央幼年学校、一高、高等師範の柔道師範も兼ねていた。同時期に、方々の柔道大会で大活躍。学習院の柔道大会では最強組を5人抜いて院長の近衛篤磨公爵にその技を絶賛されさっそく学習院の師範となった。

当時のアメリカ大統領セオドア・ルーズベルトは勇壮豪快な行動を好む性格で勇名を馳せていた。日露戦争での日本兵の勇敢さは彼に深い感

銘を与えていた。山下義韶六段を通して知った柔道を世界有数の体育法と評価し自ら山下の弟子になった。そして、この父にもまして柔道に興味を持ったのが娘のアリスで、自分も柔道を習いたいとルーズベルトに懇願。ルーズベルトは日本大使館に適当な師範を派遣してくれと依頼した。大使館では大統領の頼みということで、外務省を通して講道館に相談を持ち込んだ。選ばれたのは当時五段だった富田常次郎だった。富田の渡米が決まると誰か現役の強い者を一人同行させるのが良いだろうと、当時学生柔道界のナンバーワン・早大生の前田が第一候補になった。嘉納師範は「富田六段、前田四段、合わせ十段が良い」と言って前田を四段にした。

前田が推薦されたのは、ただ柔道が強いというだけでなかった。嘉納師範の武士道精神の影響を最も強く受け継いでいた一人であったからだという。アメリカ行きが決定した前田に政界の重鎮であった後の内閣総理大臣犬養毅から「日本民族を代表し、三流国と見なされている日本を一流国にせよ」という使命を受け、二尺三寸の名刀「長船」が贈られ激励された。

MEMO 本覚克己流 柔術

江戸時代を通して、津軽地方の弘前藩と黒石藩では本覚克己流という地域独自の柔が伝承されていた。津軽の武士が学ぶ柔術は必ず本覚克己流で、津軽の柔といえは、この流派のみを指し、津軽以外の地には流出することはなかったと言われている。江戸時代初期に弘前藩士・添田儀右衛門が心極流を基にして創始した本覚克己流は永きにわたって津軽地方の多くの青少年を育成し、地域の振興に貢献してきたが、昭和50年代を境に衰退し、伝承途絶の危機にある。令和の現在、弘前では少数の有志が、残された資料や口碑を拠り所として、歴史に埋もれかけそうになっていたこの武藝文化の復活を目指し活動が続いている。

MEMO 嘉納治五郎と講道館

嘉納治五郎(1860～1938)は日本の柔道家・教育者・貴族院議員・兵庫県出身。講道館柔道の創始者であり、柔道・スポーツ・教育分野の発展や日本のオリンピック初参加に尽力するなど、明治から昭和にかけて日本におけるスポーツの道を開いた。公益財団法人講道館は、柔道家であり、教育家でもある嘉納治五郎により1882年(明治15年)5月に創設された柔道の総本山。1909年(明治42年)に財団法人となり、段位の発行、大会開催、講習会、機関誌の発行、書籍の刊行など柔道普及のための諸活動を行っている。



嘉納治五郎

柔道世界普及の旅(欧米・中南米制覇時代)

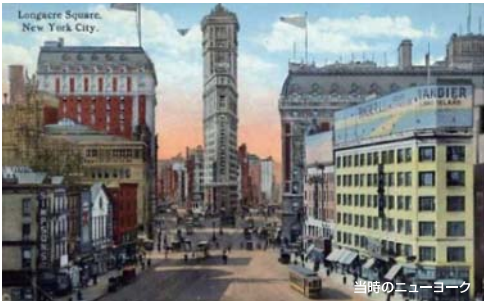
屈辱の米国デビュー

1905年(明治38年)1月中旬、前田は講道館四天王の一人富田常次郎と共にニューヨークからほど近いウエストポイント米国陸軍士官学校に招かれて柔道を紹介することになった。そこで前田は士官学校のレスリングチャンピオンと勝負することになった。レスリングチャンピオンは前田の2倍ほどある大男。前田は両袖を捉えて腰を深く入れ技をかけた。レスリングチャンピオンは簡単にひっくり返った。しかし屈強なレスリン

グチャンピオンはすぐに起き上がる。柔道のルールではこれで勝ちになるが、レスリングのルールではマットに肩がつかなければ負けにならない。闘いは延々と続いた。相手が上になったところを下から締め技をかけた。これが見事に決まって、相手は落ちる寸前となった。前田は「締め落とし技は残酷と思われるかもしれない。柔道普及にアメリカへ来たばかりで、落とすのはまずい…」と思い、手を緩めた。それが失敗だった。学生たちは前田が下になっっていたので、フォール負けと解釈し、「日本人が負けた」と騒ぎ出し、負けを宣せられた。前田は「しまった」と思ったがもう遅い。こうして最初のアメリカでの柔道公開は屈辱の結果となってしまった。

ゼロからの出発 ニューヨークに道場開設

ウエストポイントの出来事からほどない2月、前田はプリンストン大学へ柔道の紹介に出かけた。「誰かお望みならば稽古する」と言ったところ、たちまち3人の希望者が現れた。前田の脳裏をかすめたのはウエストポイントでの悲劇。ここプリンストン大学でも再びアメリカ人を喜ばすことになったら、柔道は役に立たないというイメージが定着してしまう。絶対負けられなかった。前田は手加減をせず1人目、2人目を連続して投げ飛ばし戦闘不能にさせた。それを見た3人目の挑戦者は、前の2人の状態を見て恐れをなして「時間がない」と苦しい言い訳をして試合を辞退した。これでやっと前田は柔道の強さを実証することができた。数日後、同校から20人ばかり入門を希望する者がいるので指導に来てほしいと頼まれ、週2回教えに行くことになった。その後もニューヨーク各地で講演活動を続け、ニューヨークのジムのオーナーと共同で柔道の道場を開くなど、柔道普及の在り方を模索した。アメリカ人の気質は伝統や格式よりも実証を旨とする。柔道の強さを証明するためには、稽古で「型」を見せるよりも実際に挑戦を受けて、どんな試合でもいいからその勝負に勝つところを見せなければならぬ。前田は講道館の誓いに背き、異種格闘技との公開試合に活路を見出す方向に舵を切って行った。



当時のニューヨーク

異種格闘技戦 栄世から「光世」へ改名

1905年(明治38年)5月、ヤマト・マエダと名乗る小柄な日本人柔道家が1,000ドルを賞金に挑戦者を募集した。これに世界一の怪力男の異名を持つブルクリンのブッチャーボーイという巨漢レスラーが名乗りを上げた。同年7月、試合はマンハッタンビーチの日本人村で前田初の異種格闘技戦が行われた。試合が始まるとブッチャーボーイは大きな手を伸ばして、しゃにむに突進してきた。柔道家にしてみればこうして突進してくる者ほど闘いやすい。その勢いを利用して、身体を開いて両袖をつかんで体落とし、起き上がってくることを巴投げ、浮腰と、面白いように技が決まってい。終わってみればあっけない勝負だった。会場に詰め掛けた同胞たちは割れんばかりの拍手を送った。これまでジャップと侮辱され惨めな思いをしてきた同胞たちにとって、前田の雄姿は徐々に胸のすく瞬間だったとともに、日本人としての誇りを取り戻す瞬間であった。

MEMO リングネーム「ヤマト・マエダ」〜栄世から「光世」へ

前田は公開試合におけるリングネームとしてヤマトの名前を使っている。これは前田が自ら日本人の魂を背負って闘うことを選び、異国の地で出会った同胞たちを勇気づけるためという説や、講道館に対して名前を変えることで柔道人としてのけじめをつけて公開試合に踏み出したという説もある。1905年(明治38年)7月ちょうどブッチャーボーイ戦のころ、前田はニューヨークの日本公使館に出かけ、幼名の栄世から「光世」に改名している。

連戦連勝

ブッチャーボーイとの闘いに勝利した前田は、以降、連戦連勝を記録していく。ボストンのマイヤーというレスリングとボクシング両方のミドル級チャンピオンは前田に締め落とされ失神。アトランタで試合をしたヘビー級レスラーのサム・パーカーという選手はスタミナ切れで戦意喪失。ボストンでは、ビール樽のような巨漢と闘ったが前田はリングいっぱい振り回し、巴投げで投げ飛ばした。次から次へと名乗り出てくる腕自慢の巨漢たちも前田の敵ではなかった。

MEMO 武勇伝:ボストンの夜

ある夏の夜、前田はボストンの街をそぞろ歩き、途中カフェでビールを2、3杯ひっかけ、近くの安宿に泊まろうとすると、宿屋のオヤジから「お前みたいなジャップに泊まる場所はない」と突き飛ばされて尻を蹴られた。これに怒った前田はそのオヤジの足を払って投げ飛ばし失神させてしまった。ビックリした宿屋の店員が大声で警官を呼んだ。駆け付けた警官は事情も聴かずに前田に平手打ちを食らわせた。それに逆上した前田は警官を道路に叩きつけて、その場を去ろうとした。その時、背後からピストルが鳴った。「止まらなければ撃つぞ!」前田はそのまま警察署へ連行された。警察署で前田は、自分は柔道の日本チャンピオンで、柔道がいかに優れた格闘技であるかを説明。前田の語に署長は感心し、数日後、部下に柔道を教えてくれと頼みこんできたという。

英国に渡る

1907年(明治40年)2月、前田を乗せた船はイギリスのリバプールに到着した。イギリスでは柔道が知られており、柔道を曲がりなりにも理解してくれる人たちが多く、若者たちが続々勝負を申し込んできた。前田は挑戦者を手加減せず存分に投げまくった。それを見た観衆は驚いて「新参の日本人柔道家は恐ろしく強い。あんなに投げられたのは見たことがない」と大評判となった。イギリス第二の都市グラスゴーではレスリングの猛者たちから続々と勝負の申込みがあったが、すべて撃破。「この柔道家は力を入れずに楽々と投げる。実に巧妙だ。まったく強い!」と評判を呼んだ。

前田は多くのイギリス人から好かれ、オックスフォード大学在学の家豪の青年の家に招かれたり、日本刀愛好家、世界の弓術研究者といった人々の知遇を受けたり、次第に顔が広くなっていった。

柔道着を脱いで世界レスリング大会に挑戦

1908年(明治41年)1月から2月にかけてロンドンのアルハンブラ劇場で、世界各国のレスラーを集めて「世界レスリング大会」が開催された。外国人レスラーたちは柔道家を「柔道着を脱げば陸に上がったカッパのようなものだ」と悪口を言った。柔道はあらゆる格闘技に対抗できることを大衆の目の前で示さねばと前田は出場を決意。柔道着を脱ぎレスラーとして出場した。前田は中量級と重量級に出場。中量級では途中で敗退したものの、重量級では見事準優勝を果たした。中量級の前田が重量級の決勝まで勝ち上がるのは驚異的なことであった。

MEMO この頃の前田光世の手記から

レスラーと対戦する時、絞めや逆を取っても巧みな相手に会おうと容易ではないが、絞めではなく、首を抱くのが一番早い。次は素早く後ろに回って、羽交い絞めか送り襟絞めがいい。巨漢相手にはこっちら寝に行っても、下から十字固めをかけてもいいが、剛力な相手だと両手を突っ張って振り離してしまう。その時は素早く変じて、突っ張った相手の腕の逆を取ると大抵は決まる。

“ロシアのライオン”ジョージ・ハッケン・シュミットに闘わずして勝つ

アルハンブラ劇場の大会の後、当時ヨーロッパ最強といわれていたロシア人レスラー“ロシアのライオン”ことジョージ・ハッケン・シュミットが新聞紙上で「今や一時期世間を騒がした日本柔道も音沙汰なく、我がレスリングによって一掃されてしまった。物珍しさに柔道を習った人々の気が知れない」とコメント。それを見た前田はその新聞を手にシュミットの試合会場に乗り込み「自分と勝負しろ」と迫った。すさまじい前田の剣幕に恐れ、シュミットは「あの記事は私が言ったことではない。記者が勝手に付け加えたんだ。私はプロのレスラーだ。流儀が違うと言っても柔道と勝負して負けたらそれでおしまいだ。どうか察してくれ」と哀願。その申し入れに前田は苦笑した。

シュミットはこの2カ月後の4月3日、アメリカシカゴで4万人の大観衆を前に、フランク・ゴッチとプロレス初代世界チャンピオンを争い、伝説の試合を行っている。

MEMO ジョージ・ハッケン・シュミット（1878～1967）

エストニア、タルトゥ生まれのプロレスラー。近代プロレスリング創成期を代表する選手として活躍し、ロシアンライオンの異名をとった。ペアハッグの発明者としても広く知られる。統一世界ヘビー級王座に絡み、フランク・ゴッチと1908年(明治41年)と1911年(明治44年)の二度の対戦を行う。この時の興行形態、観客動員数は近代プロレスの転換を促すこととなった。2016年(平成28年)4月2日、WWE殿堂のレガシー部門に迎えられた。

コンデ・コマの称号を受ける

しばらくの間、ベルギーや、イギリス各地を巡遊していたある日、スペインのバルセロナから「柔道講師に来てほしい」という依頼が入り、前田はスペインに向かった。前田を招へいたのはバルセロナで一流の劇場の持ち主だった。ちょうどその時、我こそ日本一の柔道チャンピオンだと名乗る男がいて、近々バルセロナに来るという噂があった。劇場主は前田とその者をどっちが強いが闘わせようとしていて、前田がバルセロナにいと知ったら逃げてしまう。それでは劇場主の計画が外れて困るという。そこで前田は本名を隠さねばならなくなった。前田は何と変名したらよいものかと考えたが妙案が出てこない。これは困る。それにこの不景気で困る。困る困ると考えて「前田コマルはどうか?」と自ら吹き出したが、ゴロが悪いのでコマルのルを省いて単にコマとした。ところがスペイン人の友人が単にコマでは調子が悪いからと言って、コンデ(伯爵)という尊称をつけてコンデ・コマと呼ぶことになった。一度本物のコンデ(伯爵)がホテルへ訪ねて来られて困ったことがあった。向こうは前田を伯爵だと思って礼を厚くした。他にも本物の伯爵から「コンデ、コンデ」と呼ばれるのに大いに困惑した前田はあまりみんな信じないのでニューヨークの日本領事館からもらった本名の証明書を見せたこともあったという。

スペインで柔道が流行

バルセロナ及び首都マドリードにおける柔道公開試合はすべて成功した。スペインでの試合はほとんど闘牛場で行われ大盛況だった。コンデ・コマの名前はスペイン中に広まり、マドリード、バルセロナには「コマ・クラブ」という道場も開設された。こうしてスペインで柔道が流行した。スペイン人は欧米の中では小柄なタイプで、どちらかと言えば日本人に似ているところに前田は親近感を抱いていた。当時、米西戦争で敗北し、フィリピン、グアム、プエルトリコなどを失い、その上キューバに独立されるなど、国内に挫折感が流れていた。「大きなものが小さなものに勝つは当たり前」という風潮の中で、大國ロシアに勝利した小国日本への尊敬、前田の「小さい身体で大きな相手を投げる」柔道に神秘性を感じていた。

キューバ

1908年(明治41年)12月14日、前田はキューバの首都ハバナに到着。キューバでは賞金付きの飛び入り試合を演じるために条件をどうしようかと思案していたところ、もうすでに当地の新聞に挑戦者を求む大げさな広告が掲載されていた。今度、当地へ来るコンデ・コマと勝負して勝った者には1万ドルを差し上げる。負けずに10分間保った者には200ドルを差し上げる。前田は1万ドルは滑稽だと苦笑した。これは本人に何の相談もなく彼を招待した興行主が一方向的に仕組んだものだったが、今さら取り消させる訳にもいかず前田は受けて立った。我も我もと白人も黒人も東洋人も次々と試合を申し込んできたがどれも前田の敵ではなかった。毎晩、毎晩いろんな挑戦者が現れたが、前田は一度も負けなかった。前田の名前はキューバ全島に轟き、在留日本人から「コンデ・コマのおかげで、これまで中国人と同一視されていた我々日本人は一気に一等国民扱いされるようになり、肩身が広がった。このついでにキューバを一巡して全島民に日本人の偉いところをしっかりと見せてやってくれ」と毎日各地から手紙が届いた。

世界チャンピオンのフランク・ゴッチ、ジャック・ジャクソンに挑戦状を出す

前田はキューバ滞在中に、同じくキューバに滞在していた初代プロレス世界チャンピオンのフランク・ゴッチや史上初の黒人プロボクシングヘビー級チャンピオンのジャック・ジャクソンに挑戦状を出したが、2人とも前田の挑戦を無視した。ゴッチはハネムーンでキューバに来ており、ジャクソンは「東洋の小男と闘っても何のメリットもないばかりか、仮に敗れでもすれば名前に傷が付き、大変な損失になる」とやんわりスルーしたという。

メキシコ

1909年(明治42年)7月23日、前田はメキシコへ向かった。到着すると新聞は早くも前田が来ることを報じていた。日露戦争を契機に日本独自の格闘技としての柔術、柔道への興味が世界的広がりを見せはじめていた。メキシコでは円い柔和な顔で、鬼を挫きそうな恐ろしいところは全くない前田が欧米諸国の強者たちを投げ倒したとはとても信じられないと評判であった。最初のころは薄気味悪く思ったのが誰も挑戦しなかった。ある時、陸軍大学に招待された。学生たちは大統領が臨席する唄の舞台上で前田と勝負してみようと、数人の強者が代わる代わる挑んだが、前田は少しも手加減せずに次から次へと投げ飛ばした。このことを地元の新聞が大きく取り上げ、前田の評判は高まり、メキシコでもその勇名は高くなっていった。そんなある日、思いがけなくヨーロッパから前田の噂を聞きつけた15人のレスラー軍団がメキシコへ乗り込んできた。前年のキューバでの前田

の活躍を新聞で知り、前田の後を追ってメキシコへ渡ってきたのだった。その面々は米、独、仏、伊、露、英等各国の名うての猛者が集まった一団で、いずれも体重100～150kgはあった。その一団の代表“ドイツの無法者”ストルバンと対戦、前田はフットワークを駆使して投げつけ押さえつけギブアップを奪った。観衆一同、コンデ・コマに大歓声を送り、「コンデ・コマはやはり強い」と大いに感心した。

前田は常に世界各地に住む日本人移民たちを訪ねては日本人としての誇りと勇気を与えた。メキシコでも日本人が集団で入植しているアメリカ国境近くの地域を訪ね歩いた。ある日、前田はメキシコシティ北西約300kmにあるレオンの街を訪れた。そこでは町一番の猛牛をひねり殺すほどの怪力の持ち主カービオと闘牛場で勝負した。この男は2m近い大男で元レスラーだったが、猛牛と組み打ちすることで名前を売っていた。ゴングと同時に、上等席の観客から「コンデ・コマ〜♡」と美しい声援が一斉に起こった。見ると美しく装った婦人の一団がハンケチを振って前田を応援していた。婦人たちは有名な温厚紳士の日本の柔道家コンデ・コマを一目見ようと続々入場していたのだ。この婦人軍に影響され、一般男性の客までも「コンデ・コマ」と叫ぶ。いつの間にか会場はコンデ・コマへの声援一色となった。カービオは前田を抱きしめ牛首絞めの技で攻めてきた。小さい前田は彼のふところに深く潜って背負い投げを決めた。カービオの巨体は宙を飛んでマットに落ちた。前田の早業に観客は総立ちになって拍手喝采。試合後は狂狂した婦人たちの握手攻めにあった。翌日の新聞は「怪力の持ち主カービオは、昨夜闘牛場で子供の如き小身の日本柔道家コンデ・コマに、人形のごとく弄ばれた」と報じた。

MEMO この頃の前田光世の手記から

アメリカの国境の近くにいる。サボテンの散在する大砂漠の中を汽車は走っている。自慢するわけではないが近ごろではどんな田舎町に行っても我輩を知らぬ者はおらぬ。それがまた我輩にはありがた迷惑で時々閉口する。うるさくからこっそり散歩すると、コマが来たこと、たまちのうちに野次馬に包囲される。料理屋に行くことものなら大変で、まるで王侯貴族のように取り扱うから、こちらもその気になって大いに贅沢しなければならない。

MEMO 武勇伝:アメリカの国境近くで

アメリカの国境近くの町で、メキシコの知人数人と酒場で飲んで談笑していると、いつの間にかガラが悪い見知らぬ男が交じって飲んでいた。こんな時グズグズしていると、日本柔道家もギャングに恐れをなしたと悪評が立つ。前田はその男の腕を捕まえて外へ放り出した。やがて食事を終え、友人たちと別れてホテルへ向かっていると、さっきの男が現れて「俺の顔を潰しやがって」とピストルを構えた。前田は胸を突き出し、「撃てるものなら撃ててみる!」と前に出た。男はその迫力に狼狽して逃げ出した。この事件の全容は付近一帯に知れ渡り新聞記事にもなった。その後、訪問する町で「ピストルを持ったギャングを素手でやっつけた」とコンデ・コマの名は一段と高くなった。

MEMO この頃の前田光世の手記から

外国人、特にアメリカ人はこっちがおとなしくしていると、どこまでもつけあがる。弱い者いじめは、ほとんど彼らの国民性と言ってもいいくらいだ。私は平常を熬ていて何か起こった時はウンと油を搾ってやることにしていた。言いたいだけ言わせて後で断固として実力に訴える。あの時だって私が逃げ出していたら撃たれていたらう。

再びキューバへ渡る

1910年(明治43年)7月、前田は再びキューバに渡った。ハバナの市民は喜んで前田を迎え入れ、柔道社会の世界武者修行者として市民は好遇した。キューバでの柔道人気はどんどん高くなっていた。

中南米を巡遊

1912年(大正元年)の真夏、中南米への本格的な柔道普及の旅を開始した。キューバでの活躍でコンデ・コマの名は周辺諸国に轟いていた。まずはグアテマラから柔道講演の依頼が来ていたので、そこを皮切りに中南米の旅が始まった。これまでの柔道講演には興行師が間に入るとサーカスの一部の扱いにされてしまい、柔道普及には向かないことが多かった。前田はメキシコ駐在の日本公使に依頼して、行く先々の大統領に手紙を出してもらっていた。公使も中南米諸国に対して近い将来日本と国交を結ぶ必要もあり、前田にその露払い役を期待した。この時期の中南米諸国はスペインから独立してはいないものの、まだまだ政治的には安定しているとはいい難く、各国は自分たちの国の在り方を模索している状態だった。まだ国交もなかった日本だったが、日露戦争に勝利した新興国のモデルとして注目されていた。グアテマラの講演では知事や市長をはじめ多くの著名な市民が見物に来た。知事は特別に陸軍の楽隊を連れて来て景気を添えてくれた。首都のサン・サルバドルでは劇場で飛び入り自由の柔道講演を行っていたある夜、アラウジョ大統領が諸大臣を引き連れてやってきて、熱心に見入っていた。これを聞いた前田は大統領に面会を申し込み、軍隊に柔道を普及させたいと進言。大統領はこれを快諾、陸軍大学で1カ月間柔道指導を行った。

パナマではちょうど太平洋とカリブ海を結ぶ運河の建設工事が行われており、アメリカ人の荒くれ労働者が多く入り込んでいて、日本人柔道家を負かしてやろうと多くの挑戦者が来る来るわの大騒ぎ。前田はすべて返り討ちにした。ペルーの首都リマでロシア人と闘った時は、多くの観客が詰めかけ、劇場の2階の桟敷席が崩壊する珍事があり、20数名の重軽傷者を出した。以後、劇場では試合が出来なくなってしまった。前田は中南米遠征の道中、各地で奴隷のごとく酷使され、惨めな生活を強いられた日本人の移民地を可能な限り訪ね歩いた。彼らは噂に聞く前田が訪れるのを待っていた。移民たちは日本柔道家が「大和」を名乗り、普段自分たちを蔑視する地元の力自慢たちを自由自在に投げ飛ばす姿を見て胸が躍った。前田は異国の地に生きる日本人移民たちのシンボルとして、絶対に負けられない覚悟で闘っていた。こうして彼は旅を続けるほどに益々日本民族の将来の発展の地の必要性を感じるようになっていった。

ブラジル

アマゾンでも前田の名前はキューバやメキシコ辺りから噂り響いていた。前田はベレンに居を構え、柔道場「アカデミア・デ・コンデ・コマ」を開設。海軍、警察、大学、スポーツクラブ等から引つ張りだこの人気を博した。この街に来る各国のレスラーの挑戦に応じて派手に勝ち抜き、応援するベレン市民を狂喜させた。公開試合も頻繁に行って賞金を稼いだ。いつしかコンデ・コマの名前はベレンだけでなく、アマゾン全域に広まった。当時のアマゾンの人々はコンデ・コマによって初めて日本人を知り、日本という国に好感を抱いていた。それは、その後次第に増えていった日本人たちにも向けられて行った。



レイシーとの遭遇

グレイシー一族との遭遇

前田は徐々にベレンにも慣れ、州知事や市の要人と親交を深めて行く中で一人の人物と出会う。その人物の名はガスタオン・グレイシー。ガスタオンはこの地で政治家、学者として成功をおさめていた。ガスタオンは、悪ガキぶりに手を焼いていた長男のカルロスを前田のもとに入門させた。カルロスが14、15歳の頃であった。カルロスは以後4年間前田のもとで柔道を習い、1925年(大正14年)リオデジャネイロで「グレイシー柔術アカデミー」を開いた。多くの一族や弟子たちがこの道場で学び、そして分派していった。この道場こそが現在数多くあるブラジリアン柔術のルーツである。カルロスの弟のエリオは、グレイシー柔術をさらに改良し洗練させ、異種格闘技戦も数多く行い、不世出の柔道家といわれた木村政彦に黒星を喫するまで、20年以上も無敗を誇り、国民的英雄になった。

MEMO 木村政彦(1917～1993)

日本の柔道家、プロレスラー。段位は講道館柔道七段。鬼の木村の異名を持つ。全日本選手権13年連続保持、天覧試合優勝も含め、15年間不败のまま引退。「木村の前に木村なく、木村の後に木村なし」と讃えられ、後々にも史上最強の柔道家と称されている。身長170 cm、体重85 kgと小兵ながら、トレーニングにより鍛え抜かれた強靱な肉体、爆発的な瞬発力、得意技である切れ味鋭い大外刈りのスピードとパワー、高専柔道で身につけた寝技、またこれらを支える一日10時間を越える練習量と柔道に命を賭す強靱な精神力を武器に15年間不败を成し遂げた。

MEMO エリオ・グレイシーVS木村政彦

1951年(昭和26年)9月23日、日本の柔道家・加藤幸夫がブラジルの柔術家エリオ・グレイシーに試合を挑まれ、絞め落とされ敗北する。エリオは加藤だけではなく、日系人柔道家たちを次々と破り、ブラジル格闘技界の雄となっていた。加藤敗北の結果を受けた柔道家木村政彦は、同年10月23日にリオデジャネイロのマラカナン・スタジアムにおいてエリオと対戦した。2ラウンド開始3分で木村の大外刈からのキムラロック(腕がらみ)でエリオは腕を折られた。しかしエリオは強靱な精神力でギブアップせず、木村も骨折したエリオの腕を極めたまま、さらに力を入れ続けた。会場が騒然とする中ついに試合開始から13分後、セコンドの兄カルロスがリングに駆け上がりギブアップをしないエリオに代わって木村の体をツップしエリオは敗北した。後年、木村はエリオの事を「何という闘魂の持ち主であろう。腕が折れ、骨が砕けても闘う。試合には勝ったが、勝負への執念は私の完敗であった」とその精神力と武道家としての態度を絶賛している。エリオも「私はただ一度、柔術の試合で敗れたことがある。その相手は日本の偉大なる柔道家・木村政彦だ。彼との戦いは私にとって生涯忘れぬ屈辱であり、同時に誇りでもある」と語っている。柔道の技「腕がらみ」がブラジルやアメリカで「キムラロック」もしくは「キムラ」と呼ばれるのはこの試合が由来となっている。エリオが木村の強さに敬意を払い名付けたとされる。

キューバからの招待

1921年(大正10年)にはメキシコとキューバから招かれて、前田は再びニューヨーク経由でカリブ海周辺の国々を約1年半かけて周遊した。同年11月20日、ハバナのバylett劇場にてフランス人格闘家のアンドレ

ス・フォルニエールと闘った。前田は43歳になっていた。一進一退の激闘はラウンドで決着。10年ぶりに見るコンデ・コマの雄姿にキューバの人々は再び酔いれた。キューバからベレンに戻った前田はブラジル国籍を取得した。前田は髪にも髭にも白いものが混じり始めてきたが、堂々たる体格と慈愛に満ちた性格がブラジル人の心にも伝わってベレンの名士として十分な名声と信望を得ていた。

前田ベレン定住を決意

アマゾンの地には他と違って前田の心を捉える魅力が満ちていた。一つは日本人への差別意識がなかったこと。伝わっていたのは日露戦争勝利から来る日本人への称賛だけだった。二つには日本の何十倍もあるアマゾンの未開の大地だった。サンパウロやリオデジャネイロで聞いていた「アマゾンに人が住むところではない」「密林には猛獣がうようよしている」といったこともなく、赤道直下とはいえ、水陰は涼しく暮らしやすかった。ここならば一から自分の理想の大地を建設できる。こここそ、国士たる自分の夢を具現できる「可能性」を持つ大地だと前田は夢を膨らませた。明治中期から大正にかけて日本の移民は北米やラテンアメリカに多く渡ったが、排日機運が高まっている北米への移民は不可能な状態であった。そのため、昭和になると国策で移民の主流は満州(中国大陸)へと方向が変わり、国を挙げて中国に目を向け大陸移住を進め続けていた。そんな中で前田は日本人移民の最適地として南米アマゾン移住を主張した。前田は世界放浪の中、各国の排日が渦巻く現実を目のあたりにしていた。それに対して排日のないアマゾン河沿岸の地はほとんど開発が行われておらず、広大なジャングルがそのまま手つかずで残っていた。日本移民を受け入れてくれる桃源郷はアマゾンしかないと確信し、前田は日本とブラジルの双方の利益のためにブラジルに帰化しベレンの人間となった。以後、生涯のすべてを日本人のアマゾン移民殖産事業発展に捧げて行った。



アマゾン河沿岸

Episode4 1923～1941

アマゾン開拓時代

開拓の父～アマゾンに死す

前田の熱心な要望活動が実を結び、1924年(大正13年)アマゾンの経済復興に苦慮し外国の資本と移民の導入による再開発の必要性に迫られていたブラジル政府(パラ州はリオデジャネイロにあった日本大使館を訪れ、「アマゾン開拓には日本人の力が必要である。せむ100万ヘクタールの土地を無償で提供したい」と申し入れた。こうして1929年(昭和4年)9月7日、ブラジルの独立記念日に第一回アマゾン移民189名を乗せたモンテビデオ丸がリオに到着した。アマゾンは対岸も見えない大河と人を寄せ付けない無限に続くジャン

グルの世界。移民たちはこの陸の孤島で、黙々と木を切り倒し、耕作地を作りカカオの種子を蒔いた。しかし、その成長はほとんど見られず、更に土壌が粘土質のため、農作物は思うように育たなかった。仲間割れ、資金不足、風土病… 入植前のバラ色の夢は完全に打ち砕かれた。多くの移民たちはアマゾン開拓の前途に次第に不安を抱き始め脱耕する者が後を絶たなかった。前田は入植事業がなかなか好転しない状況に心を痛め続けた。いつしか前田の酒の量は増え続け眠れぬ夜が続いた。次第に追いつめられる身体は徐々に蝕まれ、持病の糖尿病が悪化、腎臓炎から来る尿毒症に苦しみ、腎臓を患って1941年(昭和16年)11月28日前田はアマゾンでその生涯を終えた。

前田の死に接するや、ベレンの地元新聞はもちろん、サンパウロの中央紙まで、筆を揃えて「コンデ・コマの死は一大損失である」と哀悼の意を表した。

Episode5 1941～

死んでもなお、生き続ける前田の魂

「勿論、アマゾンの植民は一両年にして栄華の実を結ぶものではない。私の死体が墓の下に朽ちて白骨になった頃、この辺に日本人コンデ・コマの墓標は在るはずだと繁栄した同胞移民の手で苔の生えた小さな墓標が探し出される日がくることを信する。その時、私の霊魂は不滅に残って自分の信念が貫徹されたことをどんなに喜ぶであろう…」

(晩年の前田の手記から)

ピメンタ(胡椒)の奇跡

1935年(昭和10年)、前田と入植事業をともに行ってきた会社が破綻した。明日は閉鎖される会社の試験場の片隅にハート型の葉を茂らせた2本の若木が元氣よく伸びていた。それは日本から来た移民監督官が2年前偶然シンガポールで入手し試験的に植えた20本の胡椒の苗のうち、生き残った2本だった。そのままにしておけば、やがて野生化してわからなくなる。たまたまそこに居合わせた適正作物に研究熱心な2人がこの苗を1本ずつ譲り受け、それぞれの畑にその若木を植え増殖していった。戦争中もなお、この東洋種胡椒の移植、育成、施肥と研究を続け終戦時にそれらは800本に増えていた。胡椒の主産地である東南アジア諸国は戦いに侵され胡椒樹の多くが枯れてしまった。インドネシアは戦前、世界一の生産高を誇ったが、戦後、食料自給政策のため胡椒園の多くを米作地に切り替えていた。このため世界的に胡椒が不足した。ブラジル人の消費する胡椒はほとんどが輸入品であったことから、戦争で輸入が止まり国内のストックが底を突き始め、胡椒の値は日に日に上昇し続けた。胡椒の産地としてまったく無名であったアマゾンが世界にその名を轟かせるようになり、「生き地獄」とまで呼ばれた植民地が胡椒によって一躍羨望の植民地と化した。前田の死から10年。ようやく植民地に産業定着の陽が射し込んだ。

前田をルーツに持つグレイシー柔術の台頭

1993年(平成5年)11月12日、アメリカのコロラド州デンバーで、第一回アルティメット・ファイティング・チャンピオンシップと言う名の格闘技の大会が開催された。この大会は日本の格闘技界に大きな衝撃を与えた。それはこの大会が噛み付き・目潰し・金的(急所)攻撃以外なら全て有効という究極のルール(ブラジルではこうした試合形式を「バーリ・トゥード」という)のもとに闘われたという理由もあった。もっとも衝撃的だったのはこの大会で日本ではほとんど無名であったグレイシー柔術と

いう格闘技を身につけたホイス・グレイシーの闘いぶりであった。ホイスは小柄な体躯で道着を着ていなければ誰も格闘家だとは思わない風貌であった。この大会に出場した格闘家は、柔術家、空手家、キックボクサー、力士等、バラエティーに富んでいた。日本でもお馴染みの豪強も多数出場、決して質の低い大会ではなかった。しかし、終わってみれば、ホイスがこの大会の優勝者になっていた。しかも無傷でなおかつ全ての試合を秒殺ともいえる速さで勝ちを制した、正に圧勝であった。その時、ホイスの父・エリオが「私たちの兄弟はブラジルのベレンで前田という日本人から柔術を学んだ」と告白。これにより前田光世の名前が、平成に入って再び脚光を浴びることとなる。グレイシー柔術の登場以降、全米中の格闘技の道場やジムでブラジリアン柔術が普及し始め、柔術をバックボーンにもつ格闘家が好成績を収めるとその他の格闘家も寝技を研究していき、格闘技界の情勢が一変、その後の世界の格闘スタイルに変革をもたらした。

MEMO 時空を超えた弘前DNA対決

アルティメット・ファイティング・チャンピオンシップ以降、グレイシー柔術は日本の格闘技界を席巻、対グレイシー戦で名だたる日本人選手が苦杯をなめた。ホイスの兄で400戦無敗の異名を持つヒクソン・グレイシーと弘前出身のプロレスラー船木誠勝が2000年(平成12年)5月東京ドームで対戦。テレビの実況中継で「グレイシー一族に柔術を伝えたのは船木と同じ弘前出身のコンデ・コマこと前田光世、奇しくも弘前のDNAを持つ者同士の闘い。これは偶然か、それとも必然か!」とアナウンサーが叫んだ。試合はヒクソンが勝利したが、前田光世を介す、時空を超えた巡り合わせであるこの試合は総合格闘技ファンの間で語り草となっている。

MEMO ブラジル移民時代のアントニオ猪木との接点

前田光世がアマゾン開拓道半ばで逝去し十数年が経過した、猪木寛至(後のアントニオ猪木)14歳の時、戦後、家業が傾き、猪木一家はブラジル移民に一纏の夢を託す。ジャングルを抜け到着したコーヒー農園で、夜明けと同時に鐘の音で起こされ、ひたすらコーヒーの収穫作業。手袋は破れ、手の皮がむけて血が噴き出し、傷が癒える暇がないほど、その労働環境は過酷だった。コーヒー農園での1年半の雇用契約を終えると、一家はその後、落花生栽培に成功。サンパウロの青果市場で働きながら、猪木は全ブラジル陸上競技大会の円盤投げで優勝し、同国遠征中だった“日本プロレスの開祖”力道山の目に留まりスカウトされる。猪木家の長男で拓大空手部の実力者であった寿一と四男の宏育は、この頃、サンパウロとリオで空手道場を開く。当時のブラジルは、前田光世の影響で柔術が盛んで、柔術道場が乱立。空手がまだブラジルで認知されていなかった時代、空手道場を開くと必ずグレイシー柔術に代表されているブラジリアン柔術の猛者と称す人間が道場破りにやって来たという。ブラジルに柔術を広めた日本人の前田光世の弟子たちが空手道場を打ち破りにくる。これは同じ日本にルーツを持つ2つの格闘技が、当時のブラジルで交戦していたということである。このエピソードから、相当な実力がなければ当時のブラジルでは格闘技の道場は開けなかったことや、ブラジルにおける前田光世の影響力の凄さが伺える。